

# フロベール『聖ジュリヤン伝』における 「狭間」の世界

橋本 由紀子

聖人は、神と人間との中間に位置付けられる。『聖ジュリヤン伝』は、神と人間との関係が、避けられない運命の導きによって描き出される物語である。この物語が収められた『三つの物語』においては、共通して素朴な信仰の在り方が描かれているが、そこに見出されるのは教条的なキリスト教ではなく、人間が始原的に抱く感情が表れる場としての「崇高な世界」である。これらの物語においては、人間の自然発生的な感情が日常を超越した崇高な世界へと繋がられていく。ジュリヤンの物語においても、恐怖心や畏れ、衝動や欲望という感情に翻弄される人間が、やがて聖なる世界に至るまでの道程が描かれる。そこで本論では、神に導かれるジュリヤンの生を、感情の働きとジュリヤンを取り囲む世界との関係という観点から見てみたい。ジュリヤンの生涯は、複数の感情のせめぎ合いの中に開かれる「狭間の世界」ともいうべき領域によって語られていく。親殺しという苛酷な運命を課されるジュリヤンは、どのように自らの運命をとらえ、聖なる者への道を歩んでいくのだろうか。

## 1. 親しいものと不気味なもの 両親の地

人が不安を掻き立てられ、恐怖に戦慄するのは、どのような時だろうか。私たちはしばしば、空想と現実との間が消し去られ、それまで空想的と思っていた何かが現実として自分たちの前に現れる時に恐怖感を覚える。『聖ジュリヤン伝』において、神の存在は戦慄によって感知され、ジュリヤンと神との関係は不気味なものとして姿を現す。不気味なものは、日常的な世界に、そこにあるはずのないものとして現われる。しかしそれはその世界に全く異質のものな

のではない。フロイトによれば、不気味なものは見知らぬ新しいものではなく、かつて慣れ親しんだものの再登場によってもたらされる<sup>1)</sup>。心的生活にとって昔から親しい「何か」の出現が、恐怖心を呼び起こすというのである。つまり戦慄をもたらす「何か」は、外部からやってくるのではなく、自分の内部に立ち現われると考えられる。親しんできたものでありながらその正体が不明瞭であるもの、なじみのものでありながら日常からは隠されて表に出ないはずのもの、それが不気味なものとして姿を現すのである。不気味なものは私たちに、日常の中に潜む非日常世界の存在を垣間見せる。それは親しいものの中に隠れた、次元の異なる何かの蠢きによって感知される。『聖ジュリヤン伝』は、重苦しい不気味さに満ちた物語である。ジュリヤンは絶えず不安や戦慄に脅かされながら、両親の殺害に向かって牽引される。しかし両親の殺害自体が恐怖の源泉なのではない。不気味なものは、その行為に向かってさまよう過程に現われる。

物語は「ジュリヤンの父母は、丘の中腹の、森の中の城に住んでいた」という一文から始まる<sup>2)</sup>。この城は陰しく切り立った堅牢な岩根に築かれ、幾重もの囲いで守られた場所でありながら、濠の水も乾いた恒常的な平和が支配する地である。「どの階にも」、「至る所で」、「ぎっしりと詰まった」、「蔵いっぱい」等に満ちた」等の言葉が重なることで、城の隅々にまで満ちる豊かさが強調されたこの城は、修道院のような規律で守られた、満ち足りた世界とされている。ジュリヤンは、両親の「神への祈りが通じて」この地に生を受ける。城の豊かさに反映される、豊かな愛情に満ちたこの故郷は「両親の地」といえるだろう。「ジュリヤンの父母が住む」という一文から始まる空間描写は、ジュリヤンを生み、守り、育てる場所を設定している。ところがジュリヤンを脅かす「不気味なもの」は、手厚く保護されたこの地で育まれる。そしてその表出は、両親に授けられる、ジュリヤンの未来に対する輝かしい予言に端を発していると考えられるのである。

ジュリヤンの父と母はそれぞれ別々に予言を授かる。母は寝室で、月の光のもとに現われる隠者のような老人から、息子が聖者になるという言葉聞く。その老人は月光の上をすべるように空中を昇って行き、姿を消す。そして父は明け方、霧の中に現われた乞食のジプシーから、「多くの血、多くの誉れ、常

なる幸福、皇帝の一族に」というお告げを受ける。ジプシーは地中に消える。二人はこの輝かしい予言を受けた息子を「神のしるし (marqué de Dieu)」と考え、限りない敬愛の情 (égards infinis) を感じる<sup>3)</sup>。しかし二人ともこの予言の存在を胸に秘め、決して語ることではない。こうして垂直方向にこの地を貫くように放たれた予言が、見えない神の力として、ジュリヤンの生を牽引していくことになる。しかしこの「力」が、ジュリヤンにとっては負の方向に表れる。それがもう一つの予言として発露されることになる。

ジュリヤンは両親の地を、ただ殺戮の快感のみを追い求めて駆け巡る。母の抱擁も「深い夢に沈んでいるように」冷ややかに受けるばかりである。血の欲求に覆われて、ジュリヤンは完全な無感覚状態にある。

ジュリヤンは交互に弓を引き、剣の鞘を払い、匕首を煌かせて、獲物を飽かず殺し続け、何も考えずただ無我夢中だった。自分はいつからか、どこかの土地で狩をしている。自分がいるだけで、全てが夢の中の感覚で易々とやっとのけられる<sup>4)</sup>。

これは、無限に生じる欲望が完全に満たされ続けている状況である。鹿の大群を全滅させても、「自分がなぜそれだけのことを成しえたのか」わからない。しかしジュリヤンは、この血で煙った世界に現われる黒い大鹿によって、突如覚醒させられる。ジュリヤンは大量殺戮の狩の果てに、視界に入った大鹿と草を食む雌鹿、そしてその乳を吸う小鹿という平和な家族の情景の中に、反射的に矢を射る。しかし三頭の鹿を矢で貫く行為は、やがて両親と自分とに刃を向ける状況に重ねられることになる。一方、額に矢を受けた大鹿は、額に刺さった矢を感じていないように、死骸を踏み越えてジュリヤンに詰め寄る。死の不在を目にして、ジュリヤンは初めて「言い知れない激しい恐怖」に打たれて後ずさりする。「不気味なもの」として出現する「慣れ親しんだもの」とは、ここでは思うままに手にしてきた「死の感触」であるといえるだろう<sup>5)</sup>。大鹿は、死の不在を提示することで、初めてジュリヤンに死を認識させる。不気味なのは、常に何らかの「驚愕」をもたらす。それは、それまでの世界を一変させる重大な「瞬間」を示唆する。この大鹿から「いつの日かおまえは自分の両親

を殺すだろう」という言葉が発された瞬間、無感覚のままに安住してきた最も親しい空間は、最も忌まわしい世界となる。両親を亡き者にするということは、故郷としての世界を崩壊させることを意味する。霧の中に埋もれていた世界は、自らの衝動によって滅ぼされるものとして輪郭をあらわにしたのである。その夜、ジュリヤンは自分の内に、予言を実現させてしまう「かもしれない」存在を見出す。

その夜、ジュリヤンは眠らなかった。吊られたランプの揺らめきのもとに、あの黒い大鹿がいつまでも見えた。あの予言がつきまとった。ジュリヤンはそれを打ち消そうともがいた。「いや！いや！ばかな！殺せるはずがない！」しかしそう思うそばから考えるのだった。「でも、殺したくなってしまうたら？」ジュリヤンは、悪魔が自分にそんな気を吹き込んだらと思うと恐ろしかった<sup>9)</sup>。

ジュリヤンの内部で馴染み、出現した不気味なものは、ここで「悪魔 (le Diable)」と呼ばれる。「悪魔」は、死の感触がこの上ない快感をもたらすことを知らしめる者である。今後ジュリヤンを脅かし続けるこの存在は、自分の内に蠢く他者であり、自分を突き動かす見えない力となる。悪魔という存在は、これまで自分の中で混沌と充満されていた衝動が、ここで戦慄すべき力としてジュリヤンの内に立ち現れたことを示しているといえるだろう。この恐怖は、自分自身の内的世界に起因する、免れることのできない宿命である。こうして、自分を守ってくれていた豊かな安息の場所としての「両親の地」は、激しい不安に満ちた「殺戮の対象としての両親」を象徴する世界となる。この地で発された明暗二種類の予言は、二面性を持つ動きとなって、ジュリヤンを導くことになるだろう。

## 2. 現実と幻覚－自分自身の地

ジュリヤンは放浪の時期を挟んで、三つの世界に身を置く。両親の城から逃げ出し野武士の群れに身を投じたジュリヤンは、戦の功績によってオクスタニ

アの皇帝から妻と宮殿とを賜り、なだらかな海辺に二番目の世界となる住まいを構える。ここは、いわば自分の力で得た「自分自身の地」である。しかし逃れようとした忌まわしい世界は、この地で幻覚として再生される。平和な民に取り巻かれた安息の日々を送りながら、ジュリヤンは恐ろしい幻覚に襲われ続ける。その幻覚は、故郷の思い出に巢食う殺戮の感触を再現する。夢の中で、ジュリヤンは永遠に続く殺戮を行っては、目覚めてからもその余韻に苦しむ。「両親に会えないことに苦しみながら、別の渴望に耐え切れなくなってきた」<sup>7)</sup>という状況が端的に示すように、ジュリヤンは両親への愛情と血への渴望という、相反する感情の間で逡巡する。抑制と衝動との間に生じては消える幻覚は、ジュリヤンの内で拮抗するバランスを揺り動かし、不安定なものにしていく。幻覚は、必然的に実現される親殺しを予告する。ジュリヤンの内部では、幻覚が現実に入り込むと同時に、現実が幻覚に映し出されている。この狭間の世界においては、ひとつの世界にありながら同時にもうひとつの世界にいる感覚、時間の内にありながら同時に時間の外にある感覚がある。現にいる世界と、その裏に蠢く絶対的な時間の流れとこのように貫入が、ジュリヤンが未だ捉えきれない運命の動きを浮き彫りにする。ジョヴァンニ・ボナコルソは、ジュリヤンを「意識の混濁や幻覚、空間・時間的な方向性の喪失、記憶の混乱に次々と見舞われる犠牲者」としているが<sup>8)</sup>、この混乱は、ジュリヤンに働く力とジュリヤンとのせめぎ合いの表出であり、現実と幻覚の境目がない世界を示唆する状態だといえるだろう。そして現実と幻覚が絶え間なく交錯し続けるこの領域が、両親を生贄に捧げる場として準備されていく。

ジュリヤンの内面に展開される現実と幻覚との貫入の動きは、日々確実に進んでいく。そして長い逡巡の果てについて行われる狩において、ジュリヤンはあらゆる種類の動物たちに取り巻かれ、「身動きできないほどの恐怖」を伴う狂乱の世界に没入していく。この狩と同時に、捧げものとなる両親が故郷から訪れ、ジュリヤンのベッドに身を横たえることになる。ジュリヤンの逃避と同じ期間息子を捜し求め、物乞いにまで身を落とした老人たちは、逃れたはずの故郷から姿を現した現実といえるだろう。そして恐慌の果てに振り下ろされた刃が両親の胸を貫いた時、大鹿の予言以来交錯し続けてきた幻覚と現実とが統合される。

横たわった二人は、心臓を刺されて、身動きしなくなっていた。ジュリヤンは注意深く、二つのほとんど等しい途切れがちの息づかいを聴いていたが、それが次第に弱まるにつれて、もう一つ、遙か遠くに、別の息が続いてくる。はじめははっきりしなかったが、その長く引く恨むような声は、近づいて来たと思うと、力がこもり、残酷さを帯びた。ジュリヤンに戦慄が走り、あの黒い大鹿の鳴き声だとわかった<sup>9)</sup>。

聞こえてくる声の主を認識した瞬間、ジュリヤンは幻覚と現実との「間」の消去を知り、恐怖に打たれる。この世ならぬ世界から聞こえる大鹿の声は、この世を去っていく両親の臨終の息に重なることで、予言の実現を宣告したのである。やがて夜明けの赤い光が、ジュリヤンの目の前に両親の血で染まった光景を照らし出す。この光景はもはや不気味なものではない。実現されたものとして曝された現実なのである。ジュリヤンを突き動かしてきた力の正体は、この光景のもとで明らかになる。しかし犯されてしまった殺害行為は、今度は事実と結合した幻覚一回想としてジュリヤンを襲い、苛み続けることになるだろう。

海辺の宮殿における穏やかな日常生活の平和は、常に正体不明の不気味さを孕んでいた。ジュリヤンが怯えていたのは、自らの衝動と、そこに働く目に見えない力であった。この恐怖心は、両親の死に帰結する。大鹿の予言が実現された時、両親の死に顔は「永遠の秘密」(un secret éternel)を宿しているように見える。永遠の秘密とは、最初の輝かしい予言である。両親は皇帝の娘婿という息子の身分を知ると、自分たちが受けた予言を思い出し、そこに「永遠の輝しさの曙」(l'aurore des splendeurs éternelles)を見る<sup>10)</sup>。しかしこの曙は自分たちの死から立ち昇るものだった。両親の死は、極限的な罪の土壌としてジュリヤンの再生をもたらすことで、実際に永遠の輝きを生じさせるものとなるだろう<sup>11)</sup>。

このように、ジュリヤンを聖人とするためには、両親の殺害が必要不可欠な試練とされている。そこで、「親殺し」が聖性を孕むほどの極限的な罪とされる過程を見ておきたい。この罪には、人間に生来備わった「タブー」と呼ばれ

る触れてはならないものへの接触に対する忌避と欲望の問題がある。タブーの反対語が「普通の」、「誰でも近付ける」事柄であることから、この問題はジュリヤンに内包された「特殊な領域」を説明することになるだろう。

### 3. 畏れと欲望・神聖なるものと不浄なるもの－親殺しの意味

タブー tabu という語はポリネシア語で「聖なる」という意味を持ち、超自然的な力を持つ事物に対して社会的に厳しく禁止される行為を指すが、とりわけ神聖なものに対する接触の畏れを表す。そして接触への忌避に注目するとき、タブーという語がアンビヴァレントな意味を持つことが明らかになる。この語は、「神聖な」、「清められた」という意味を持つと同時に、「不吉な」、「不浄な」という意味を併せ持つ<sup>12)</sup>。タブーにおいては本来、神聖と不浄とが共存するのである。タブーは、宗教的あるいは道徳的な禁止であるが、それは内的必然性に従っておのずから生じた禁忌である。この禁忌の源泉には、神聖・不浄の区別以前に、魔力と呼ばれる力に対する恐怖がある。この恐れは、人間が抱く克服しがたい恐怖を象徴する。タブーの背後には、犯せば恐ろしい災いが起こるという原始的な警戒心がある。しかしその禁止には、接触への激しい欲求が孕まれている。タブーは接触の欲望ゆえに在り、それが欲望を上回る恐怖によって抑圧されることで成立しているのである。

ジュリヤンもまた、「触れてはならないもの」に対して恐れると同時に、それを穢そうとする衝動を持つ。ジュリヤンは絶えず接触を欲望しながら恐れ続ける。この緊張関係にジュリヤンのドラマがあるといえるだろう。しかし通常タブーに対するアンビヴァレントな態度は、合流し得ないがゆえに継続する。禁止は明瞭に意識されても、接触欲は無意識の中に抑圧されているからだ。ところがジュリヤンの場合は、大鹿の予言によって、本来は無意識の領域に閉じ込められているはずの欲望が、強制的に意識化されている。それゆえにジュリヤンには、タブーを必然的に犯すと定められた者としての激しい葛藤が生じ、その時期が定められていないことから、この葛藤は継続し続ける。予言がもたらす恐怖は、未だ犯されていない殺害行為よりも、衝動による殺害の「可能性」に見出される。ジュリヤンには、忌避の前に既に犯した殺戮行為の感觸がある

ために、その可能性すなわち「悪魔」の力の働きは、勢力を保ち続けるのである。

ジュリヤンを支配する殺戮の快感は、幼少の頃から長年にわたって、無意志的状态で得られてきたものであった。ジュリヤンの最初の獲物は、ミサの最中に顔を出す白いハツカネズミである。棒の一振りで、この動物の一滴の血が、聖堂の祭壇前の床に「染み (tache)」をつける。

長い間待っていると、ばら色の鼻先がのぞき、まもなくネズミは全身を現した。軽い一撃で打つと、もはや動かなくなった小さな身体を前に、ジュリヤンは呆然と立ちつくした。血が一滴、床を汚していた (tachait)。ジュリヤンは自分の袖で素早く血痕を拭い、ネズミを外に投げた。そして、誰にも何も話さなかった<sup>13)</sup>。

床を汚す一滴の血は、神聖な場が穢されたしるしとして描かれ、素早く染みを消して口をつぐむ行為は、ジュリヤンに走った流聖の戦慄を物語っていると思われる。この瞬間に、ジュリヤンの生は裏返される。幼子イエスに譬えられ、神のしるしを受けた息子として「限りない敬意」をもって慈しまれていたジュリヤンの生は、一滴の血によって、殺戮の快感へと向かう。動物の殺戮はタブーとはされない。しかし、大鹿の親子の殺害が象徴的に両親の殺害に重ねられた時、血を求める本能はタブーに繋がられる。「犯されるタブー」としての両親の殺害は、そこに動物たち、特に鹿の親子を仲介者として狩への欲求が重ね合わされることで成立する。しかし殺意が直接両親に向けられなくとも、両親殺害の予言が狩への欲求に起因するとジュリヤン自身に認識されていたことから、狩を再開したことでタブーそのものが意識的に犯された事実は否めない。

それでもジュリヤンに課されたタブーの試練は、聖なる道に繋がられるためにある。ジュリヤンは、タブーが孕む激しい欲望と恐れとの間に身を置くことで、選ばれた者としての生を進み始める。聖なる生に落とされた血は、親子という神聖な絆に剣を突き立てるという流聖的な行為へと発展するが、この行為はやがて聖性の裏側に位置付けられ、聖性と罪との表裏一体性を形作ることになるのである。

欲望と抑圧とは、第一部と第二部の対となる主題としてせめぎ合い、聖なるものに通じる道は、その間に開かれる。欲望は、自ら追い、狩る行為へとジュリヤンを導くが、抑圧は、逃げ、狩られる状況を引き起こす。二つの狩が、それを象徴する。故郷における狩で、ジュリヤンは自在に獲物を捕らえ、殺戮の感触を存分に味わうが、それに対して第二部の狩では、「自分より上の力に自分の力が消される」のを感じながら、全く獲物に触れることができず、逆にあらゆる種類の動物たちに追われ、囲まれ、擦られ、くすぐられ、打たれる。動物たちは、接触の主体を逆転させることでジュリヤンの狂気を募らせ、運命的な行為へと送り出す。動物たちの行動は、神の手の動きを思わせる。この動きにジュリヤンの意志は関わり得ない。どれほど目的地点への到達を免れようとしても、ジュリヤンはいつの間にか定められた道を確実に歩いているのである。

しかしどうしても同じ道へ戻ってしまう不気味さは、ジュリヤンが目的地への到達の不可避性を、漠然と感じながらも認識し得ないがゆえに生じている。両親が受けた予言が秘密にされている以上、黒い大鹿の正体も予言の信憑性も、ジュリヤンに明らかにされることはない。事実と認識とのこの落差が、先に見た、同時に二つの世界にいる感覚を生み出しているのだといえるだろう。自分の運命に対するジュリヤンの認識は、次のように描かれる。

親しい諸侯たちからは狩に誘われた。ジュリヤンはいつもそれを断った。こうした贖罪の苦行が、自分の災いを避けてくれると信じていたのだ。それというのも、動物たちの殺生こそが、両親の運命の要因となっていると思われたからだ<sup>14)</sup>。

この時ジュリヤンは、親殺しの予告を自分の身に振りかかった「災い(malheur)」つまり不運と見なし、欲望の抑制という贖罪(pénitence)によって実現を避けることができると信じている(croire)。動物の殺戮が両親殺しの要因だと「思われる(sembler)」という表現にも、予言が修正可能との希望的推測が表れている<sup>15)</sup>。しかし狩自体がタブーではなく、親殺しが未だ行われていない限り、衝動の抑制は贖罪の苦行とはならない。タブーとは、決して触れてはならな

い、近付くことも許されない行為である。先に見たように狩は仲介物にすぎず、ジュリヤンには親殺しこそがタブーとして提示されているのである<sup>16)</sup>。

狩り、狩られる者としてのジュリヤンは、衝動－欲望と抑圧－畏れとの間を通って、確実に親殺しへと向かい、その行為を犯す。こうしてタブーに触れることで、ジュリヤン自身がタブーとなる。それは、次の場面で明らかにされる。

その日の暮れに、ジュリヤンは妻の前に姿を表し、常ならぬ声で命じた。

まず自分に返答するな、近付くな、もはや目も向けるな、これらは全て取り消すことのできぬ命令ゆえ、背けば地獄の劫罰を受けるだろう<sup>17)</sup>。

そして全ては「神の御旨に従ったこと」であるとし、自分はこれを限りに「もはやこの世に存在しない」ゆえ、自分の魂のために祈ってくれるようにと言い残す。この言葉によって、ジュリヤンの生そのものが捧げものとなったことが明らかにされる。親殺しは、自らがタブーとなるための供儀であったのだ。こうしてジュリヤンは、タブーが持つ、不浄なものと神聖なものとの表裏一体性を体現する。供儀とは、何ものかを世俗の領域から神聖な領域へと横断させる儀礼である<sup>18)</sup>。ジュリヤンは、狩り、狩られるという接触の領域から、もはや触れられることのない領域へと移るのである。

#### 4. 地上と天上との間で－間隔の超越

神への畏れは、脅威による屈従ではなく、絶対的な優越性に対する本能的な服従から生じる。自分自身で宣告した通りに、ジュリヤンは「生ける死者」となる。あらかじめ定められた生は、神に捧げられた生である。親殺しの罪はその事実を認識させるものであった。大鹿の予言は、行為遂行的な力を持つ神の御言葉であり、ジュリヤンは両親を生贄に供すると共に、自らの生を捧げることで神に応えた。贖罪とは、犠牲を捧げて罪を贖う行為である。生を捧げるとは、生を死に向かって投げかけることであり、死は永遠に通じる扉となる。聖人は生と死の関わりを示す存在である。ジュリヤンが経てきた試練は、死がもはや意味を持たない、開かれた世界へと向かうための手続きなのである。その

ためにまずジュリヤンは、自らを生ける死へと投げかけなければならなかったのだ。

比較的短い第三部においては、第一部と第二部で経た世界を超越した、贖罪の世界が描かれる。この世界は、祝福された生と呪われた生というジュリヤンの二重の運命が、ひとつに溶かされるための場である。贖罪の期間もまた、聖なる領域へと向かいながら地上の罪の重みに耐え忍ぶという、天と地の間の領域に位置付けられる。世界から疎外された、「捧げもの」としての生は、現実世界にありながら、現実とは一線を画した世界に置かれる。ジュリヤンは、死んだものとみなされながら、地上に残されている。大罪を犯した者という烙印を押されながら、もはや人間の法の外にいる。人々はジュリヤンの身の上を聞くと、十字を切って逃げ去り、目に触れないように戸を閉め、雨戸をおろす。それでもジュリヤンは時折、「人の生活にまじりたい欲望」から、空しく町に下りていく。しかし人々の日常生活とジュリヤンとの間には、越えがたい溝が見出されるばかりである。ジュリヤンは人間の世界だけではなく、動物からも疎外される。しかし犯した罪はジュリヤンを地上に繋ぎとめ続ける。世界から拒絶されて孤独を求めても、世界を見聞きする感覚そのものが、ジュリヤンを罪の意識へと絶えず引き戻すのである。

ジュリヤンは人の気配のない場所を捜し求めた。しかし風は死人の喘ぎ声のような音を聞かせ、地に落ちる露の涙は、別のもっと重みのある滴りを思い出させた。太陽は、毎夕、雲のあいだに血を抃げた。そして毎晩、夢で、親殺しが繰り返された<sup>19)</sup>。

こうして拒絶されながら繋ぎとめられ、閉め出されながら閉じ込められるという状況が、ジュリヤンの世界を宙吊りにする。贖罪の意識は、ジュリヤンの苦しみを和らげるところか、罪の反芻によって、ますます重いものにしていく。鉄釘を縫いこんだ苦行衣も、膝で歩いて赴く教会への参拝も、苦痛を通してジュリヤンを苛むばかりで「呵責の念は聖櫃の輝きをも曇らせ」る。全てを後方へと送ってくれるはずの時間は堂々巡りし、死すらもジュリヤンを撥ね返す<sup>20)</sup>。ジュリヤンを囲んでいるのは、過去が現在に、現在が過去に収斂され、

時間の流れが停滞した世界なのである。ジョルジュ・プーレによると、思い出すという行為においては、感覚が外部ではなく自己の内部に見出されることで、対象と感覚との隔たりがなくなり、同じ強烈さ、同じ豊かさを持つ純粋な再生をもたらすという<sup>21)</sup>。回想によって、完了した物事は再び現在に戻され、再生可能なものになる。この「永遠の責め苦」に繋ぎとめられながら、ジュリヤンの生はやがて辿り着く大きな川に浮かべられることになる。

「水の流れが激しく、兩岸に泥土が広がっているために、もう長い間誰一人として渡ろうとする者はなかった」川に、ジュリヤンは渡し守として、自分の生涯を捧げる決意をする。渡し守は、川で隔てられた二つの世界を結びつける役割を持つ<sup>22)</sup>。現実から逸脱した時間の流れの中で、生と死の境界すらも曖昧となったこの世ならぬ領域に侵入しているジュリヤンは、中間領域としての川の流れに居場所を定める。この川において、ジュリヤンは天上と地上とを繋ぎ、自分の生を超越へと向かわせることになる。超越は横断の動きと上昇の動きを表すという<sup>23)</sup>。ここには「間隔をまたぎ越す」ための二重の努力が見出される。この努力が、ジュリヤンにおいては、權を運ぶ作業と重ね合わされる。ジュリヤンは定かならぬ世界の中を、絶対的な力に導かれて横断してきた。その道は、どちらでもありどちらでもないものの「間」に開かれることで、聖なるものと罪深いもの、神的なものと人間との間にある「間隔」を体現する聖人としての生を形作る。ここに広がる川は、その世界を象徴しているといえるだろう。

そしてある嵐の晩、川の唸りの中から届く、教会の鐘の響きを持つ声に呼ばれて、ジュリヤンは改めて自分の生を横断する。声に向かって船を進めようとすると、水はたちまち静かになり、船は難なく対岸に着く。しかし一度そこにいた男を乗せると、その重みが船を沈ませ、嵐にうねる川は「怒りに狂って」船を翻弄する。

ジュリヤンは身体をかがめ、腕を伸ばし、そして、足を突っ張り、さらに力をこめるために、胴をねじって反らせた。霰が手を打ち、雨は背中をつたい、風の激しさが息をつまらせ、ジュリヤンは手を止めた。すると船は波にさらわれ押し流された。しかしジュリヤンは、これが重要なことであ

り、背いてはならない命令に従うことだとわかり、櫂を取り直した。櫂受の軋りが、嵐の轟音を刻んでいた<sup>24)</sup>。

この試練の時は「長い間、とても長い間」続く。行きは滑るように走った船が、らい病の男を乗せた復路ではいつ終わるとも知れない櫂の重みとの格闘の場となる。男の重み、波にさす櫂の重みは、ジュリヤンが背負う運命の重みでもあるだろう。自分が行っている作業の重要性を感じ取りながら船を漕ぎ続けるこの状況には、ここまで否応なく受動的に流されてきたように見えながら、実のところ運命の重みを受け入れ、櫂を手に自分の力で苦しみながら進んできたジュリヤンの姿が反映されているといえるのではないだろうか。ジュリヤンの生は、天上と地上の間を進む、間断なき横断であったのだ。そしてこの横断が実は上昇運動だったことが、物語の最後で明らかになる。その時、天と地との間隔の超越が実現される。

船を下り、小屋に辿り着くと、ジュリヤンはらい病の男の求めに応じて食べ物と飲み物を与え、疥癬で覆われた男の肌を温めるために「口に口を、胸に胸を」押し当て、肌をびたりと合わせる。この瞬間、天上から来訪した人と、地上で頭を垂れ続けた人との距離―間隔が消えて重なり合い、神との合一を示す神秘体験の法悦を導く。

するとらい病の男はジュリヤンを抱きしめた。突然、その目は星のような輝きを帯び、髪は太陽の光線のように長く伸びた。焚き火からは薫香の煙が立ち昇り、河の波は歌った。そうするうちにうっとりとなったジュリヤンの胸に、あふれるばかりの法悦、この世ならぬ歓喜が洪水のように湧き上がってきた。そして両腕にジュリヤンを抱きしめている人は、次第に大きく、大きくなり、頭と足が小屋の両側の壁に触れた。屋根は飛び去り、天空は開けた―そしてジュリヤンは青い空間へと上っていき、主イエスと向かい合ったまま、天へ運ばれていった<sup>25)</sup>。

ついにジュリヤンを取り囲んでいた世界は、光り輝く姿に変貌するキリストと共に、浄化された天上のイメージに転換され、大空に開かれる。燻った煙は薫

香を放ち、嵐に叫んでいた川波は歌い、足枷のようにジュリヤンを地上に繋ぎとめていた小さな小屋は無限の天空に開かれ、泥土に沈みこんでいたジュリヤンは青い天上世界へと運ばれていく。そして「この世ならぬ一超人的な (surhumaine)」歓喜が、「洪水のように湧き上がる (descendait comme une inondation)」。「人間の範疇を超えた」法悦や、「洪水」という逆巻く水のイメージは、この反転を強調している。また「下る」という意味を持ちながら「湧き上がる」イメージを表象している *descendre* という言葉にも、下りながら上ってきたジュリヤンの歩みが投影されているといえるのではないだろうか<sup>26)</sup>。

ジュリヤンを包み込む崇高なものは、この開けた天空に象徴される。無意志的な漂流から世界との格闘へ、世界との断絶を経て牢獄としての世界へと、ジュリヤンと世界との関わりは、次第に乖離していった。しかしその隙間に流れ込む川の流れがジュリヤンと神的領域とを繋げる場となり、そこにらい病の男として現われたキリストが超現実世界を導き入れ、ついには「洪水のように」逆巻く世界の解放によって、広大な空間が開かれることになったのである。この空間が「永遠の光輝」となり、「これが、わが故郷の教会のステンドグラスにはぼこのまま描かれている聖ジュリヤンの物語である」という、物語の締めくくの一節へと帰結する<sup>27)</sup>。

## むすびー聖なるものの顕現

『聖ジュリヤン伝』は、読者の内に、神の導きとそれに従うジュリヤンとの関係の進展を構築する。聖人伝説は非・歴史的であり、個人的な人物ではなく原型的な人物が提示される、信仰内容の人格化であるとされる<sup>28)</sup>。フロベールの作品においては、神に選び出される人間の在り方が描かれるのではなく、選ばれた人間であるがゆえに辿らねばならない「道程」が描き出される。このような神の選抜と応答とのせめぎ合いに、物語の緊張が孕まれる。この作品では、ジュリヤンの外見が描かれることも、ジュリヤンが言葉を発することもほとんどない。ジュリヤンの感情が直接語られるのではなく、内面の動揺が、画面の連続と交錯の狭間に生まれる印象として伝えられることで、神とジュリヤンとの「聖なる」関係が、浮き彫りにされるのである<sup>29)</sup>。

輝かしい予言と不吉な予言に定められたジュリヤンの生涯は、生と死、畏れと衝動、神聖なものと不浄なものが、相互に貫し合う場であった。これらは分離された二つの様相ではなく、ジュリヤンというひとりの人間に表れる二つの変容態ともいうべき、常に転覆可能な裏表であった。ジュリヤンは、異なるものが対立するのでもなく融合するのでもなく、互いを侵すことなく同時に在る、特殊な世界に身を置く。ジュリヤンの生は、相反するものの区別が不分明になる、どちらでもありどちらでもない中間領域の内に露出されるのである。そもそも「崇高なもの」は、二項対立的な論理が効力を失う境界領域において生起するものとされる。そこは相反する感情が同時に立ち上る場であり、諸力が宙吊りにされる地帯である<sup>30)</sup>。崇高がこのような限界にありながら限界付けられないのだとすれば、ジュリヤンの生はまさしくこの領域を体現するといえるだろう。『聖ジュリヤン伝』においては、この世界がステンドグラスのように整然と構築され、ついには頂上のキリストへと結びつく。そして聖なる者と定められた人間の生は、人を夢想に陥らせる、聖堂内部の荘厳な雰囲気の中に完成されるのである。

#### — 註 —

- 1) フロイト「不気味なもの」、『フロイト全集 17』、藤野寛訳、岩波書店、2006、p.36.
- 2) Flaubert, *Trois Contes*, GF Flammarion, 1986, p.79. 本文中の訳は拙訳による。
- 3) *Ibid.*, p.82.
- 4) *Ibid.*, p.88.
- 5) 死に関する恐怖は通常最も不気味なものとしてされ、その恐怖は生と死の間の世界が立ち現われる時に生じる。人間と死の関係についての思考と感情ほどに、原始時代から変化していない領域はない。それは、死が全ての人間に必然であるように見えながら、実際は体験することのできない理解不可能なものであることに由来する。それゆえに死は人間の情動を最も強く揺り動かす。
- 6) *Trois Contes*, p.90.
- 7) *Ibid.*, p.94.
- 8) Giovanni Bonaccorso et Collaborateurs, *Corpus Flaubertianum III, La légende de saint Julien l'Hospitalier*, Didier Erudition, 1998, p. XL II.
- 9) *Trois Contes*, p.100.
- 10) *Ibid.*, p. 100.
- 11) キリストに象徴されるように、キリスト教においては常に再生が問題となる。「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造されたものなのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」(「コリントの信徒への手紙二」 5-17、『聖書』、新共同訳、日本聖書協会、1987、(新) p.384.)

- 12) フロイト「トーテムとタブー」、『フロイト著作集 第三巻』, 高橋義孝訳, 人文書院, 1969, p.164.
- 13) *Trois Contes*, p.83.
- 14) *Ibid.*, p.94.
- 15) ここにはジュリヤンの良心の戦いが見出せる。良心とは、人々の内にある一定の欲望、衝動の拒否を内面的に知覚するものであり、特にタブーに関する良心は、良心という現象の最も古い形であるとされる。
- 16) オイディプス王の物語にも見られるように、罪過感情は知らずに犯しても軽減されるものではない。
- 17) *Trois Contes*, p.101.
- 18) ジョルジョ・アガンベン「瀆神礼賛」、『瀆神』, 上村忠男訳, 月曜社, 2005, p.107.
- 19) *Trois Contes*, p.103.
- 20) 「火事に飛び込んでも炎に焼かれず、深い淵もジュリヤンを飲み込むことはない。」(*Ibid.*, p.103.)
- 21) Georges Poulet, *Etudes sur le temps humain 1*, Plon, 1972, p.350.
- 22) 渡し守と旅人の守護聖人である聖クリストフォロス（「キリストを運ぶ者」の意）の伝説は、聖ジュリヤン伝説に重ね合わされる。この巨人は、人に奉仕する決意をもって、橋も渡し守もない危険な川で日々旅人を運ぶ。ある日幼児が現われ、いつものように肩に乗せて川を渡ろうとすると、その重さは次第に耐え難くなっていく。その幼児はキリストであった。そしてその重みは「キリストが背負っている人類の罪の重さ」とされた。
- 23) Emmanuel Levinas, *Dieu, la mort et le temps*, Grasset & Fasquelle, 1993, p.187.
- 24) *Trois Contes*, p.106.
- 25) *Ibid.*, pp.107-108.
- 26) *descendre* は、この場面において、天から法悦が「下ってきて」ジュリヤンの内面に溢れていくという意味にも取れるだろう。いずれにせよ、*descendre* という言葉によって、上昇運動と下降運動が同時に起こっている状態が表象されているといえるだろう。
- 27) *Trois Contes*, p.108.
- 28) ユッタ・シュトレーター＝ベンダー『神的世界への同伴者 聖人』進藤英樹訳, 青土社, 1996, p.119.
- 29) ヴィクトール・ブロンベールは、『聖ジュリヤン伝』の特徴を、時間の非現実性、静止した画面 (*tableau*) の素早い継起、夢の雰囲気としている。(Victor Brombert, *Flaubert par lui-même*, Seuil, 1971, p.144.)
- 30) M. ドウギー『崇高とは何か』梅木達郎訳, 法政大学出版局, [ユニベルシタス], 1999, p.392.